



# 京機短信

KEIKI short letter

No.327 2019.07.05

京機会(京都大学機械系同窓会) tel. & fax. 075-383-3713

E-Mail: jimukyoku@keikikai.jp

URL: <http://www.keikikai.jp> 編集責任者 吉田英生

## 目次

- ・ series わたしの仕事 (7)……安田朋広 (pp. 1-7)
- ・ 折紙工学教室 (4)……杉山文子 (pp. 8-18)
- ・ 列車紀行・ぼくの細道 (5)東北ローカル線の旅(Ⅱ)……小倉重義 (pp. 19-20)
- ・ 続報1: 京大機械研究会2019NHK学生ロボコン優勝——工学部長特別賞受賞とABUアジア・太平洋ロボコン出場支援のお願い……松野文俊 (pp. 21-22)
- ・ 五十年会の歩み……下間頼一、小澤和雄 (pp. 23-27)
- ・ 第15回京機ミュージックカフェ 宝塚歌劇プレミアム特別企画 レポート 2019年5月12日(土)……北野幸彦 (pp. 28-30)
- ・ 桂キャンパスC3棟 COFFEE BREAKのご案内……出口晋成 (p. 31)



廬山寺 源氏庭の桔梗満開 (2015年7月24日)

©京都を歩くアルバム <http://kyoto-albumwalking2.cocolog-nifty.com/>

## series わたしの仕事 (7) 日立建機

安田朋広 (H16/2004卒)

### まえがき

恩師の松原先生から「series わたしの仕事」の寄稿を依頼されまして、二つ返事で承りました。参考にさせていただくため



にこれまでの「わたしの仕事」を改めて読み返してみますと、皆さんなんと立派な社会人でいらっしゃるのか。自分の事を振り返ると、特段面白い経験をしているわけでもなく、文才があるわけでもなく、書くことがあまり無い...これは困った、と思ったところで引き返すこともできず、とりあえず勢いに任せて書き始めることにしました。たいした事は書いておりません。お時間に余裕のある方はお付き合いくださいませ。

## ひとまず自己紹介

私は、物理工学科および精密工学専攻に在籍し、2004年の卒論では垣野先生に、2006年の修論では松原先生にご指導いただき、無事大学生生活を終えることができました。そして就職したのは日立建機という会社。自分が大阪出身にも関わらず、関東にしか技術系の職場がない会社。なんやかんや月日の流れは速いもので、気が付けば13年目の中堅社員となっております。

ちなみに、私が入社した日立建機とは、大まかに言いますと、油圧ショベルを作っている会社です。油圧ショベルというのは、道路工事や建設現場、鉱山での採石に使われる機械です。日立建機の標準色はオレンジ色で、有力な他社さんの製品は黄色である事が多いので、すぐ見分けが付きます。その中でも私が担当しているのは鉱山用の大型ショベルの開発です。サイズが大きくて街中で見られないのが残念ですが、遠くの山にオレンジ色の物体を見つけると、ちょっと嬉しくなります。



## 入社すぐ

大学での研究は、マシニングセンタでの加工方法に関するもので、油圧ショベルとは無縁のところにおりました。ですので、会社に入ってから「油圧とは」の勉強から始まり、重い部品を運んだり試験機に付いた泥を掃除したり油の交換をしたりと、汗・泥・油にまみれた毎日を送っておりました。

大学で油圧の研究をしている人は多くないらしく、同期もみな同じレベルから

のスタートでした。大学での研究が直接役に立つことはありませんが、研究の進め方、論理的な考え方、他者への分かりやすい説明が重要なのはどの分野でも同じですので、卒論・修論の経験は活かされていると日々感じます。

この頃困った事と言えば、現場作業員の方たちの話す茨城弁が全く聞き取れないことでした。設計者は全国各地から来ているので標準語が通用しますが、アドバイスをいただきたいベテランの現場作業員の方々は、結構な割合で濃い茨城弁…。言葉の壁を痛感しました。そして12年経った今でも本気の茨城弁はいまだに分かりません。というか私はいまだにちゃんとした標準語も喋れませんので、言語センスが無いのかもしれない。

### 少し成長した頃

油圧に関してひと通りの知識を得て、とある機種のリョベルの性能を任されることになりました。リョベルの設計には大きく分けて、構造物、レイアウト設計、性能、の三つ柱があります。構造物設計は強度や耐久性を確保する仕事、レイアウト設計は熱バランスや外観を整える仕事です。私が任された性能設計は、エンジンと油圧システムを上手く制御し、燃費良くエネルギーロスの少ない、かつ操作感に違和感の無い車体に仕上げるのが仕事です。

ひと昔前までは、新モデルの開発というと、リョベルメーカー発信で新しい技術を投入したり、顧客からの要望に対応していくためのものでしたが、最近は違って来ています。最近では、自動車と同様、リョベルの排気ガスも環境規制の対象となっており、その環境規制に合わせるのが最優先で、そのタイミングで他の最新技術を盛り込む、という状況です。各国の環境規則によって排気ガスの目標値が明確に定められ、期限が区切られ、難度の高い開発となっております。

私は性能担当ということで、主にエンジンと油圧のシステムを担当することになりましたが、環境規制対応で最重要となるエンジンは日立建機では開発しておらず、開発要望をエンジンメーカーさんに伝え交渉するという任務でした。エンジンメーカーさんからすると、日立建機だけにエンジンを供給している訳ではないので、必要以上の微調整はしたがらず、目標性能や開発スケジュールなど、ことあるごとに衝突しておりました。技術者なのに交渉事ばかりでつまらないな、と感じることもしばしばでしたが、誰しも遅かれ早かれ、対外交渉を任されていくのだろうな、と諦めに近い納得をするようにしました。今から振り返ると、目的が

異なる他者と会話する際の心構えを得る事ができ、とても良い経験になったと感じております。

また、任されたのが先進国向けの機種と言うこともあり、英語圏には何度も出張させてもらい、英語でも意外と仕事の話は出来るな、と自信を付けさせてもらいました。(街中の日常会話はイマイチ成長ありませんで、やはり言語センスが無いことも再認識させられました...。)

## 中堅になったある日

また月日が経ち、そろそろ関東には飽きたかな、関西に帰りたいな、西の方がいいな、と思っていた2017年11月のある日、辞令です。いつかはあると思っていましたが、その時が来ました。

行先は中国。西への思いが強すぎてちょっと行き過ぎました。今までの業務とも違いすぎて戸惑いました。せっかく先進国担当で苦勞して英語を使えるようになったのに。せっかくエンジンメーカーさんとの戦い、からのホットラインもできたのに。でも会社というのはそういうものですよ。あと個人的な話、同年の6月に結婚したばかりだったのですが、単身赴任...。会社というのはそういうものですよ。プライベートで節目(結婚、家建てる、子供生まれるなど)があると転勤。サラリーマンあるあるですね。

## そして中国へ

赴任前の中国語の研修約30時間を終え、2018年3月に中国に送り込まれました。日立建機中国の拠点の従業員は約2000人で、そのうち日本人駐在員は20人おります。場所は安徽省の合肥という場所で、若干の内陸地です。日立建機では現地に日本語対応可能な病院と日本人学校が無い場所は家族の帯同が許可されず単身赴任となります。ということで私も新婚9ヶ月目で単身生活に逆戻りです。



私が送り込まれた合肥は発展の途中段階で、高い建物や地下鉄が次々と建設されている真っ最中です。道がガタガタだったり、車の運転が激しかったり、テレビで見るような昭和初期の日本の姿にそっくりです。しかし、スマートフォンが生活に入り込んでおり、電子マネー決済などは日本よりも進んでいて、不思議な年代感覚を覚えます。あと、中国には白酒という強い酒があり、宴会の際はそれを飲みます。酒に強くない私としてはこれが中国で一番辛いかもしれません。日本語や英語が通じない他は意外と快適に生活することができます。茨城弁や英語同様、やはり中国語もなかなか覚える事ができません…。言語センス無し、ですね。

中国で働く中で、文化の違いによってたくさんの衝撃を受けておりますので、いくつか紹介させていただきます。

日立建機では中国の拠点に赴任する場合、赴任先では日本での役職より一つ上の役職が与えられます。日本以外では、肩書が無い人の言う事は聞いてもらえない、というのが顕著なためです。と赴任前に聞かされていましたが、実際その通りでした。その人がどれだけ良い人でも、言っている事が正しくても。日本では、自分に与えられた仕事に対して、本来の責任範囲から少し上下に幅を持たせて、自分なりの考えを持って仕事をする人が多いように感じます。例えば「上長はこう考えているから自分にこのような指示をしたんだな、じゃあ次はあれが必要だから準備しておこう」という感じです。対して中国では個人の責任範囲が明確で、「自分は上長から命令されたからこれをやる。なぜ必要かは言われてないし考える必要も無い。それは上長の仕事。」となります。ここに肩書の無い人からもっと良い提案があっても、「その考えが正しいのは分かるが、責任を負うのは誰か？自分は負いたくないから、やらない」となります。上長の考えが正しかった場合、とてもスムーズに進みますが、失敗した場合はひどいこととなります。誰に責任があるかの押し付け合いが始まり、なかなか解決に向けた本来の議論が始まりません。この不毛な状況に陥らないように管理するが日本人駐在員の任務の一つです。

次に、中国の方はとても優秀です。私のいる開発設計の部署には日本語を話せるスタッフが大勢いて、仕事の会話には困りませんし、業務として依頼した事はキッチリ仕上げたようなものを持って来ます。しかし工場の製造現場の方では、きちんと見ていないと手を抜く人が多いように感じます。どうやら、「楽をして稼

きたい」という考えが露骨な人が、日本より多いようです。またそういう人に限って、自分では何もしないのに要求だけは強い口調でまくし立てて来たりします。カッとなるのを抑えて捌くという、精神鍛錬の場になります。幸い、私と一緒に働いている方は真面目でどちらかという日本人に近い感覚を持っている方が多いので、助かっています。二極化が激しいようです。逆に、このような能力は高いがサボリたがる人たちが全員本気を出して何かやったら、中国はとんでもなく恐ろしい国になるのではないかと、とも思います。

これら二つの例は昨今の日本の労働者の様子を伝え聞いていると（自身の経験はありませんで、あくまでニュースなどで耳にしたものです）、日本も2~3年先に同じような状況になっているかもしれないと考えるようになりました。この「モチベーションの高くない人をいかにして動かすか」という問題に対応する解はまだ見つけられていませんが、中国赴任の間に経験を積みさせてもらおうと考えています。



それから、人から信頼を得ることがとても重要です。中国の方は身内での結束が強くて、外界に対して壁が高く、こちらが正しいことを言っても全く取り合ってもらえない時がありますが、ひとたび信用を得てその輪の中に入り込めれば、ちょっと無理のある依頼でも聞いてもらう事ができます。これも程度の差はあれ日本でも同じでしょうから、将来に向けた練習をさせていただいています。

そんな事に気を付けて仕事をすれば、中国で上手く行くのではないかな、日本に戻った時にも活用できるのではないかな、と模索している今日この頃です。技術者として社会に出たつもりだったのですが、最近は「いかに気持ちよく仕事をしてもらうか」に気を配って仕事をしています。

## 最後に

みなさんも日本国内に限らず全世界で活躍されると思います。その際、英語や中国語（または日本国内でも方言）のような語学力は直接的に重要であると理解されやすいですが、その奥にある文化の違いを受け入れて一緒に仕事をするということを意識されると、仕事に一層の面白みが出たり、かけがえのない仲間を得るチャンスが増えると思います。

以上、流れに任せてたどり着いた現在地について書かせていただきました。お付き合いいただきましてありがとうございます。